

C-8 日本との関係史

345. アンボン事件の傭兵

アンボン(→225)で起きた歴史にいうアンボン事件は二つあり、その両方に日本人が深く関わっている。最初の1623年のアンボン事件は香料貿易を巡るオランダとイギリスの対立である。アンボンで英国側の日本人傭兵の七蔵という侍^{さむらい}の怪しげな行動を口実にオランダ側は英国の商館員と日本人を捕えて拷問にかけて、オランダ要塞奇襲計画を捏造し、英国人商館員10名、日本人9名、ポルトガル人1名を処刑した。

この事件はオランダが香料貿易を独占するための謀略として英国の世論は沸騰した。残念ながら日本側の資料にはアンボン事件は存在していない。従って徳川幕府が抗議したという事実はない。太平洋戦争中に日本軍は【南進の先駆者 ここに眠る】という碑を城跡に建てたが、戦後オーストラリア軍が撤去した。

日本人の南方進出は江戸時代初期に始まっていた。1620年にアンボン島で銀鋌が発見されたことから、作右衛門以下22名の日本人がバタビアから派遣された。日本人は技術者として評価されていたらしい。出身地は平戸、長崎、唐津、肥前、筑後で平均年齢は28歳である。1632年には63名の日本人がアンボンにいたとい記録がある。

もう一つのアンボン事件は太平洋戦争開始直後である。連合軍からアンボンの守備を任されたオーストラリア軍は蘭印軍と異なり日本の侵攻に激しく抗戦した。ようやく征圧した日本軍はオーストラリア軍の捕虜を不法に処刑した。この事件は日本ではあまり知られていないが、やられた方のオーストラリアではよく知られている。

またアンボン収容所に収容された捕虜も2/3の378名が死亡した。この数字に捕虜取り扱いの過酷な状況がうかがえる。

戦後、勝者となったオーストラリアは軍事法廷で日本人を裁いた。この裁判を扱ったオーストラリア映画『アンボンで何が裁かれたか？ 原題 BLOOD OATH(血の誓い)1990年制作』がある。その映画では日本側の最高責任者はアメリカの横槍で裁判を免れる。最も悪そうな現場指揮官は追い詰められて切腹する。

結局、オーストラリア軍事法廷は通訳をしていた良心的なキリスト教徒の日本兵を銃殺にする。日本人の誰かを血祭りにすることで一件落着にする。裁判といいながら日本人に対する血の復讐以外の何ものでもなかったという問題提起の映画である。

以上2回のアンボン事件の当事者はイギリス・オランダ・日本・オーストラリアの外国人であり、住民とは関係のない支配者同士の殺戮の事件であった。しかし1999年2月から始まった宗教対立のアンボン事件(→737)はインドネシア人同士のキリスト教徒とイスラム教徒の間の痛ましい殺戮である。

⇒273.アンボン事件

346. ジャガタラおはる

鎖国以前に東南アジアで名をあげた日本人としてタイの山田長政がよく知られている。関が原の戦い以降、失業した武士は日本人傭兵として東南アジアへ進出し、東インド会社(→272)にも重宝された。1618年、スル

タン・アグン王(→337)がバタビア城を包圍した際、^{ろうじょう}籠城軍 500 名のうち日本兵が 20 名いた。1628 年のマタラムとの戦争の際も 70 名の日本人の傭兵隊がいた。兵に限らず大工や左官の契約移民の記録がある。同じ頃、アンボンでは英国側にも日本人傭兵がおりオランダに処刑されている。

徳川幕府が寛永 16 年(1639)に発したキリシタン禁教・鎖国令によってヨーロッパ人の血を受けた混血児は日本から追放された。既に寛永 13 年に長崎在住のポルトガル人と混血児 287 名のアモイ追放に加え、寛永 16 年に混血児 11 名がジャワ島へ追放¹された。

その中にエンゲレスの娘“まん”9 歳と“はる”15 歳の名前がある。はるの手紙がジャガタラ文といわれる。「日本こいしや、あらこいしや、なつかしや、こいしや、こいし・・・」と望郷を切々と訴える文は享保 4 年(1719)刊行の西川如見²の『長崎夜話草』で紹介された。あまり名文すぎるので偽作という説が有力である。

歌謡曲の『ジャガタラおはる』のジャガタラとはジャカルタのことである。ちなみに「ジャガイモ」の語源もジャガタラからもたらされた芋にちなむ。

日本追放の運命を辿った日本人の故郷の縁者にあてた商品の積み荷の依頼文の手紙等が長崎県の郷土博物館などに展示されている。

日本を追放された“おはる”はバタビアの名士と結婚し、四男三女に恵まれ、十数名の奴隷に囲まれて大邸宅に住んだ特権階級である。哀調あふれる歌詞から不幸な女性と思いきや勝ちであるが、後のカラユキサンとは異なる。

おはる以外にも同じように追放され、ヨーロッパ人と結婚し恵まれた生涯を送った者がいる。遺産争いがこじれて訴訟先のオランダで亡くなったというしたたかな女性³もいた。ちなみに“おてんば”の語源はオランダ語である。

1639 年の鎖国令によって祖国との関係が絶たれた日本人は新たな渡航者もなく日本人の血脈は南国の大地に溶解した。

日本の鎖国時代においてオランダ商館のある長崎の出島は、いわば唯一の世界への窓であった。長崎のオランダ商館は東インド会社 VOC のバタビア商館(→274)の出先であった。従ってオランダから長崎への人の派遣もバタビア経由であった。

東インド会社が解散してオランダ直轄支配に切り替わった際、日本の役人にこの間の難しい経緯を説明しても商権を失うリスクだけであるので江戸幕府には東インド会社が存続するがごとくみせかけた。

英国のラッフルズ(→276)がジャワ島を征服した際に、英国と日本の交易復活のためにオランダ船を装って船を長崎へ派遣したが、幕府の役人にオランダでないことを見抜かれて追い返されたというエピソードがある。

347. カラユキサン

鎖国から解放された明治以降、日本人は東南アジアに^{せき}堰を切ったようにあふれ出た。これら日本人の海外渡航は貧しさの故であり、南方で成功したいという一旗組であった。あるいは結果的には棄民であったのかもしれない。

¹ 織豊末期に日本人の南方進出でマニラやアユタヤには 1 万人近い日本人が居住しており、日本人町をなしていた。それに比べるとジャカルタの日本人は 300 名程度で小規模であった。鎖国令以降は 100 名程度と推測されている。

² 西川如見は 1648 年生まれの長崎の天文家、地理学者であり、元禄 10(1697)年に引退し、隠居してからは著述に専心し多くの著作を著した。

³ ⇒レオナルド・ブリュッセイ著、栗原福也訳『おてんばコルネリアの闘い』

その日本人の海外渡航の先駆けとなったのは「カラユキサン(語源は唐行)」といわれる売春婦である。例えばある資料によればジャワ島の在留邦人の断片的な数字として1897年(明治30)の125名の内100名は女性である。その職業が記されていないのは書くのがはばかられるためである。

カラユキサンは主として九州の天草、島原の貧困家庭の女性であった。当時、三池炭鉱の石炭が中国や東南アジアに輸出されていた。三池炭の積出港は島原半島の口之津である。石炭船の積荷の隙間に紛れて密出航した。

シンガポールから東南アジア各地にカラユキサンが配られるチャンネルがあり、東南アジアの都会にも田舎にもカラユキサンは居た。モームの小説にも日本人の売春宿と売春婦が東南アジアの風景として描かれている。



山崎朋子著『サンダカン8番館』というカラユキサンを取り上げたルポタージュが知られている。マレーシアのサバ州のサンダカンは当時は北ボルネオ会社の所在する新興都市である。このボルネオ島の東端の英国領にさえ8番館という大きな数字の番号を掲げるほどの日本の女郎屋があり、カラユキサンが居たということである。東南アジア各地の都市では似たようなものであった。

台湾銀行のバタビア支店、スラバヤ支店の開設時はカラユキサンの故郷への仕送りで営業が成り立ったという。トコ・ジュパン(→348)はカラユキサン相手の商売から始まった。

女工哀史の時代を経て勃興した日本の資本主義は今や押しも押されもしない世界有数の経済大国である。今、東南アジア全体が巨大な経済力を有する日本の商品の海に浮いているようなものである。

この日本の経済発展の基礎となったのは“女工”に表される明治時代の日本の安い労働力であった。綿製品をダンピングまがいで輸出して日本は工業社会にのし上がった。そういう意味で輸出されたのは日本女性の汗と涙である。しかし実は女性の肉体そのものも輸出されていた、それがカラユキサンである。

今日の東南アジアにおいてカラユキサンの痕跡を留めるのは日本人墓地の一画である。そこには墓碑らしい石が無造作にある。熱帯の容赦ない炎天は石をも焼き付け、黒く変色している。たまに刻まれた文字らしいものは風化して解読困難である。明治とか肥前とか弐拾歳とかトメなどの字の一部がころうじて拾い読みできる。

今、東南アジア各地では卒業旅行とか称する日本の女子学生の華やかな姿が国際空港、高級ホテル、リゾート地に溢れている。彼女らはちょうどカラユキサンと同じ年頃である。この両者を隔てる年数は百年にもみたくない。

348. トコ・ジュパン

カラユキサンと同時代に東南アジアへ出た日本人は見世物師とか家事従業員であったが、もっとも羽振りのよい日本人は女郎屋の大将である。神坂次郎著『波乱万丈』にシンガポールで名をはせた^{かほやま}梶山伊平次の生涯を記している。

狭い日本からはみ出た人々は小さな商売を始めた。裸一貫でジャワ島へ行商人として渡り、初めはカラユキサン相手の商売から次第に住民相手に広がる。行商から始め、勤勉がむくわれやがて店舗を構えるようになる。

これらの日本人の店はトコ・ジュパン(Toko Jepang=日本人の店)といわれ、正直者の店として人気が高かったのは住民に親切であったからといわれる。華僑は原住民に無愛想な商売をしており、詐欺同然のあくどいものがあったことの裏返しであろう。華僑の地盤へ後から入り込んできた日本人は仕事に励んだ。

特に菓の行商は歓迎された。皮膚病、眼病の菓が効いたからである。従者もつれて服装もきちんとしていた。ジャワ人には礼儀作法をわきまえない人間は軽蔑される。

トコ・ジュパンは薬品、雑貨、衣料、陶器、自転車、床屋、写真館、運送店などを営んでおり、太平洋戦争前には7~8千人の日本人が東インド(蘭印)に在住していた。当時の日本人の進出は蘭印のあらゆる街に万遍なく散らばっており、少し大きな町には華僑の商店に混じて1~2軒のトコ・ジュパンがあった。岡野案蔵は成功者の代表であり、ジャワの主要都市に「千代田百貨店」を構えていた。

日本人の南方進出の背景には当時のアジア主義の南進論があるだろう、あるいは日露戦争の勝利で日本人の評判も上がったのが幸いしたかもしれない。しかし実際に海を渡りやってきたのは国家権力とは無関係の庶民であった。

これとは遅れて日本の大商社もスラバヤ、バタビアに進出してくるようになった。大会社の場合はかつてグダン(gudang=倉庫の意味)であったビジネス街に大きな店を構える。殖産会社などの産業資本に続き外交官、銀行、船会社、商社も進出してきた。

庶民はカキリマ(→858)相当の店から大きくなったことから卑下して自らを《カキリマ族》と称した自営店主である。これに対して後者は《グダン族》といわれる多かれ少なかれ日の丸を背負った人々である。

グダン族は転勤で日本へ帰ることの決まっている人であるが、カキリマ族に帰る予定はなかった。しかしカキリマ族といえども日本国籍を残したままであり、妻は日本から迎え子供は日本人学校へやった。意識としては出稼ぎであり、移民ではなかった。

東インド植民地における日本人の位置付けは初めは“東洋外国人”として華僑やアラビア人と一緒であったが、1899年にオランダとの協定で法的にはヨーロッパ人と同等の地位が与えられた。日本の経済的進出も目覚しく、植民地は日本の国威から日本人を名誉白人として受け入れざるをえなかった。

349. 糸満の漁夫

糸満いとまんは沖縄本島の南西端にある漁港の町である。糸満の追い込み漁というのは数十名の漁夫が潜水して泳ぎながら叩きたたのようなものをヒラヒラさせ、一方では海底をたたいて音をたてて魚を脅し、海底の地形と潮の流れを利用しながら1000ふんの遠方から魚群を200ふんにも拵はげられた網の方向へ追いやる漁法である。

戦前の漁法であるので素潜りである。泳ぎもしらない農村の少年を年季奉公と引き替えの前借りで集め、海中を潜水する訓練し漁民として育てる。この結果、50ふんの海底まで、5分間も潜れるようになる。糸満の発明といわれる水中眼鏡をつけているが、肉体的に厳しい労働であることはいまでもない。

糸満の漁民は出稼ぎのため早くから国内外へ進出していた。第一次世界大戦でマイクロネシアが日本の領土になったことにより南方進出に輪がかかった。漁夫にとって南の海の高い水温はありがたいが、鮫さめという危

険と引き替えである。

植民地時代のインドネシアには沿岸で自家用消費のための小規模な漁撈はあったが、商品としての魚をとる漁業はなかった。熱帯気候ですぐに腐るため魚の商品流通は限られていた。日本人漁夫の進出は冷蔵技術とセツトになっていたため地元と摩擦はなく、バタビアやシンガポールで消費される魚の大半は糸満漁民の供給であった。

特に東インドネシアでは海賊が横行したため海岸に居住する人は少なく、バジャウ族(→662)という少数民族が従事している程度で地元漁業はほとんど存在しなかった。この地域へは和歌山、広島、山口、熊本、鹿児島、高知からの漁民も出稼ぎに来た。

マナド(→208)の外港になるビトゥン港には昭和の初めから日本のカツオ漁業会社があり、カツオ節を製造⁴していた。カリマンタン島マレーシア側のサバ州サンダカンの沖のシamil(シamil)島では日産農林系のボレネオ水産が島を借り切ってマグロの缶詰^{かんづめ}や鰹節^{かつおぶし}の製造を行っていた。戦前の日本漁民進出の顕彰として原耕という先駆者の記念碑がアンボンの飛行場の近くにある。

変わった漁業は和歌山の漁民による白蝶貝^{はくちようかい}の採集である。白蝶貝はボタンの材料であり、戦前はアジア全域での洋装化によりボタン需要が増えていた。ちなみに最近のボタンの原料は石油化学製品になったため白蝶貝採集は衰微している。

司馬遼太郎の潜水夫に取材した短編『木曜島の夜会』の舞台はオーストラリア北部である。インドネシアのアル諸島(→233)はアラフラ海を隔ててその対岸になる。アル諸島も白蝶貝採集の日本人潜水夫がいた。

今日ではその証の墓がむなしく転がっている。熱帯の灼熱の太陽の下では墓石でさえ風化の速度が速い。数十年前の墓碑の字も判読はほとんど出来なくなっている。

現在もアラフラ海に真珠養殖のために日本人が駐在している。暖かい海水の温度が真珠の養殖に適しているが、問題は海賊に悩まされることである。

350. 日露戦争の衝撃

外部世界との関連で思い出すことの唯一のことは5歳の頃に見たビンタン・インディア誌の中の写真についてである。父は学校長をしていた父が写真について説明してくれた。その写真は乃木将軍と東郷元帥の像であった。日露戦争はアジアの人々を眠りからよび覚ました。アジアの小国でさえヨーロッパの大国に打ち勝つことができることを、その戦争は示していた。アジアとインドネシアのその後の政治の発展の中で日本の勝利の意味ははかりしれないほど大きいものがあった。

上記は民族主義者イワ・クスマ・スマントリ(→313)の自伝『インドネシア民族主義の源流』に記されたものである。日露戦争の日本の勝利がインドネシア人貴族の家庭でどのように受け取られたか、そして青少年に与えた影響の大きさが偲ばれる。

インドのネルー首相の自叙伝にも同様の記述があったと記憶している。日露戦争における日本勝利の感激は全アジア人共通のものであった。

⁴ カツオ漁業には沖縄出身者が従事し 150 人ほどがビトゥン港に滞在していた。現在も当時の日本人の二世、三世が居住している。 ⇒ジャカルタ新聞 2004/8/26

マダガスカル島沖で集結したバルチック艦隊は明治 38(1905)年 4 月、マラッカ海峡を威風堂々と通過し、シンガポールの鼻先をヨーロッパの底力を見せ付けるがごとくアジアを睥睨しながら航行した。埠頭からバルチック艦隊を眺めた人は艦隊の砲撃の的になる東洋の小国の運命に胸を痛めた。

バルチック艦隊はベトナムのカムラン湾沖で休息し 50 隻余の艦隊は対馬海峡に向ったが、5月 27 日待ち受ける東郷平八郎の率いる連合艦隊によって日本海の藻屑^{もくず}となった。このニュースは全世界を驚かし、アジアの民族主義者は歓喜の声をあげた。

ヨーロッパ人がアジア人を支配する植民地構造は当時風靡^{ふうび}したダーウィンの進化論で〈優者＝白人〉と〈劣者＝有色人〉という理屈で正当化されていた。そこへアジア人の日本人がロシア人に勝利をおさめ、白人優者神話を根底から打ち砕いた。

ジョヨボヨの予言(→299)の“黄色い小人”とは日本人のことでないかという日本待望の噂が広まりはじめた。インドネシアにおける民族覚醒と記念されるブディ・ウトモ(→286)の結成は日露戦争の3年後の 1908 年である。

今日の東南アジアは自動車や電子製品などの日本商品の洪水の中にいるようなものである。かつてメイド・イン・ジャパンがつつましやかであった頃、日本を象徴する商品は『味の素』であった。その前の太平洋戦争以前は『仁丹』であった。

仁丹が人気があったのは薬用の効果だけではない。紙袋の髭を生やした軍医の絵こそ仁丹の人気の秘密である。東南アジアの民衆は日露戦争でロシア(≡白人)を破った日本の軍人を仁丹の包装紙に見付けたのである。

人々は“Jintan⁵”のシンカタン(→963)に「Jenderal Ini Nanti Tolong Anak Negeri＝この将軍はやがてわが住民を助けるであろう」という意味付けがされ、さらに人気が高まった。「オイチニー」の薬売り行進曲の人気もこの一環であろう。

351. ジャガタラ日本人会

東南アジアでは第一次世界大戦後はヨーロッパの退潮と入れ替わり、日本の進出が目立った。その頃日本で海外雄飛にロマンをはせる「さすらいの歌」が流行り、“南洋熱”といわれた。日本の経済進出が目立つようになり、蘭領東インドにとって日本は最大の輸入先になった。

日本の財閥資本もプランテーションに投資機会を求めた。財閥は初めからまとまった土地を取得するだけの資本を有しており、カリマンタン島、マレー半島のジョホール近辺には日本人によって拓かれたゴム園が多かった。ゴム園では派遣されてきた日本人従業員が監督として中国人やインドネシア人を雇用した。佐藤茂のように個人の力でガルツ高原(→110)のパパンダヤンに農場を開墾し野菜や果実の栽培に成功した人もある。

蘭印の約 1 万人の日本人社会は二重構造であった。大企業は国家の威信とともにやってきた。一方ではトコ・ジュパン(→348)の店主はカキリマから己の才覚と勤勉を資本にインドネシアの地に根を下ろし事業を拡大して成功した人々である。

⁵ インドネシア語にはもともと「jintan」というスパイスの一種があった。

両者を包含する形で 1913 年にバタビア日本人会が発足した。会長はトコ・ジュパンの個人商店主である。1925 年には日本人の多いスラバヤに日本人学校が開設された。

日本語新聞⁶も刊行された。1920 年に「爪哇日報」、1934 年に「日蘭商業新聞」、1937 年に「東印度日報」である。記者に市来龍夫(→358)、吉住留五郎(→357)がいた。

第二次世界大戦前の日本の専横的な行動は国際的孤立に追いこまれ、ドイツ、イタリアと組んだ。戦争が開始されるとオランダ本国はドイツに占領され、ロンドンに逃れた亡命政権になった。日独伊の三国同盟をバックに 1940 年 12 月に再度、芳沢謙吉を派遣したが、1941 年 6 月に交渉は打ち切られた。日蘭会商(→298)の決裂に伴い、約 5000 人のジャワ在留邦人の引き上げが始まった。

1941 年 12 月の太平洋戦争開始によって残っていた日本人は敵国人として植民地政庁によって逮捕され、オーストラリアのキャンプに抑留された。日本人に対するオランダの扱いは酷かった。

先に引き上げた邦人はジャワ占領軍に従軍し再びジャワ島へ戻ってきた。トコ・ジュパンの亭主が占領軍の尖兵^{せんべい}になった。彼らは言葉、習慣に明るいことから軍属として徴用された。占領軍の特権的地位を利用し悪徳を重ねる者もいたし、日本軍と住民との間にたって住民に感謝された人もいる。

しかし結局は日本の敗戦により営々として築いた経済進出はすべて御破産となった。敗戦国日本は小店主も大会社も小農も大農園も鉱山も工場も何もかも没収されて文字どおり裸一貫になって日本へ引き上げた。

彼らに残されたのは“南十字星”の輝きの思い出だけである。インドネシアでは南十字星を何時も見られるわけではない。ある時季、ある時間帯に南の空の地に接する所に南十字星は輝く。骨を埋める覚悟で長期に在留した者だけがその輝きを眼底に留めえた。

352. 今村均将軍

今村均中將の率いるジャワ攻略軍は昭和 17 年(1942)3 月 1 日に三手に分れてジャワ島に向かった。オランダは波打ちぎわでは抗戦シバンテン湾(→115)から上陸しようとした今村自身の乗った船が沈められるというハプニング⁷があった。

上陸して何より驚いたのは日本軍を歓迎する住民の存在である。今村はそれまでの中国との泥沼の戦いに従事していた。そこでは住民の敵意に囲まれた中での戦闘であり、住民に心から迎えられるといったことは中国では決して経験しえなかった。

今村は占領行政の長になり融和政策をもって臨んだ。民族主義者スカルノに治世の協力を求めスカルノは応じた。その時に生じた二人の信頼関係は終生変わらなかった。

日本が戦争を継続するための補給基地に位置づけられたジャワ島に対して融和政策の方がよいという今村の信念を軍の上層部は是認するも、東京の若手参謀からは今村の占領政策は住民を甘やかすものだという批判が声高であった。

現実にジャワ島上陸時の兵力の多くは他戦場へ転進のためジャワ島を離れた。その意味では今村の融和政策も単なる功利計算といえるかもしれない。

今村は第 8 方面軍司令官としてラバウルに転身したためジャワの任期はわずか 8 ヶ月であった。一応は昇

⁶ 日本人社会の充実は邦字新聞の発行に見られる。戦前の邦字新聞の研究調査が開始された。⇒「じゃかるた新聞(2004/9/28)」

⁷ 上陸軍の転覆は自軍魚雷の誤発射による。この事実は軍の上層部以外には秘匿された。

進であるが、実質は飛ばされ人事の感を伴う異動であった。しかし今村によって始められたジャワ融和政策はその後の日本のジャワの軍政に命脈を保った。

戦後に今村はラバウルでの捕虜の取り扱いで有罪になった。オランダによるジャワでの犯罪立件の取調べのため、今村はジャカルタのチピナン刑務所に収容されたが、インドネシア人看守に励まされた。結局、復讐を意図してもジャワ関連では今村を放免にせざるをえなかったのはインドネシアのオランダに対する無言の圧力であろう。

今村の率いる第8方面軍は兵力をラバウルに集中して連合軍を待ち構えたが、航空兵力、即ち攻撃力のないラバウルはパスされた。ラバウルに取り残された日本軍は持久作戦という名の下に兵力温存のまま終戦を迎えた。結果として7万の将兵は無事に帰国できた。

似たような条件にあったニューギニア戦線ではいたずらに出撃を繰り返し連合軍の掃討作戦にあい人命の損傷を重ねた。日本の軍人の多くは“楠公精神”といい、死ぬと分かりながら湊川の戦闘に出かけた楠木正成の美化された故事に捉われていた。

今村はガタルカナルの現状をみて将兵の命を無駄に散らすのを避けた。ラバウルでは自給自足が可能であったことが幸いしたが、今村のヒューマニティが評価されるべきであろう。

今村は戦争犯罪人として服役することになったが、東京ではなく自ら望んで部下と同じラバウルの刑務所におもむいた。出獄後も処刑された部下の家族を訪れるだけを責務として昭和43年、82歳で亡くなった。

日本の針路を誤った優秀な陸軍大学校出身者の中に今村均のような軍人もいたことに救われる思いである。

⇒300.ジャワ占領

353. 第16軍宣伝班

ジャワ攻略の第16軍は占領地の住民に対する宣撫工作を行う目的で宣伝部を編成し、その中に宣伝班を率いていた。町田啓二中佐を班長としてことから町田班ともいわれ、当時の日本の著名な文化人を徴用していた。

顔ぶれは浅野晃(歌人)、阿部知二(作家)、飯田信夫(作曲家)、大木惇夫(詩人)、小野佐世男(漫画家)、大宅壮一(評論家)、北原武夫(作家)、河野鷹思(デザイナー)、武田麟太郎(作家)、富沢有為夫(作家)、南政善(画家)、横山隆一(漫画家)、倉田文人(映画監督)、松井翠声(弁士)等の面々⁸である。

日本陸軍の発想と思いきや、第二次世界大戦を始めたドイツのゲッペルス宣伝相の文化部隊の成果をみてきた山下奉文將軍の進言によるものであったらしい。インドネシア占領行政を武力によらなくても文化で統治すれば安上がりという判断があったのであろう。

戦争に批判的な文化人に対しては懲罰的徴用の意味もあったが、ジャワ人に日本文化を紹介するという大義名分があった。宣伝班はラジオ放送、新聞の発行⁹、演劇の指導にあたり、トラックに資材をのせ演劇、歌、映画、漫才、紙芝居、伝統芸能を上演した。娯楽の提供には何らかの形で戦争の意義を説かれていたことは言うまでもない。

ヨーロッパ文化を否定したもののそれに代わる日本文化を提供しようと日本映画を紹介しようとしたが、貧

⁸ 宣伝班の乗船していた佐倉丸は上陸前に魚雷を受け転覆、沈没した。

⁹ 日本の占領地域の新聞発行は日本の新聞社に地域別に割り当てられた。ジャワ・ボルネオは朝日新聞、スマトラ島は同盟通信、セレベス(スラウェシ)島は毎日新聞、小スンダ・モルッカ(マルク)諸島は読売新聞である。⇒浅野健一「天皇の記者たち」

しい農村の有様が写ると原住民は日本を軽んじるだけだということを取り止めになったというエピソードもある。

1943年4月、啓民文化指導所¹⁰を設置し、本部、文学、美術工芸、音楽、演劇、映画の6部が置かれ、インドネシア人の部長の下に日本人が指導委員になった。そこからインドネシア文化の担い手となった多くの芸術家が育った。例えば内海愛子著「シアネスト許泳の昭和」によれば映画製作の起源は啓民文化指導所で許泳(日本名 日夏英太郎)という朝鮮人の貢献があり、インドネシア映画の父といわれた。

メンテン・ラヤ通 31 番地に宣伝部分室があり、管理をすべてインドネシア職員に任せた。インドネシア職員によって独立準備のための勉強会が開催されアンカタン・ムダ(Angkatan Muda)を設立し文化活動を行った。アンカタン・ムダは官製の組織であることに反発する青年グループはアンカタン・バル(→315)を形成し先鋭的な政治活動の準備を行っていた。

文筆家は現地の政策にそれほど寄与することはなかったが、日本の新聞、雑誌等への投稿したものに以下のものがある。

吉川英治「南方紀行」、大木淳夫「海原にありて歌える」、富沢有為男「ジャワ文化戦」、寒川光太郎「薫風の島々」、大江賢治「ジャワを征く旗」、北原武夫「雨期来る」、浅野晃「ジャワ戡定余話」、美川きよ「南ノ旅カラ」、阿部知二「火の島」、武田麟太郎「ジャワ更紗」、佐藤春夫「じゃかるたをとめ」、林芙美子「スマトラ」、窪川稲子「南の女の表情」、大仏次郎「スラカルタの時計」、坪田穰治「インドネシアの子供」

354. タンゲラン青年道場

1942年2月、日本軍第16軍はカムラン湾に集結し、敵前上陸を図るべくジャワ島に向かった。佐倉丸の船上にはジャワに夢をはせる熱血の軍人がいた。柳川宗成大尉である。拓殖大学卒業後、中野学校で特務機関のジャワ要員として教育を受けた情報将校であった。

柳川はあこがれのジャワを前にして意気に燃えた。その情熱に共鳴した同乗の熱血詩人の大木淳夫が柳川に送った詩が『戦友別盃の歌』である。国民もこぞって共感した名高い詩である。

ジャワ島上陸後、柳川は先頭に立って進み、単身でバンドゥン一番乗りして日本軍は間近に迫っているとハッターをかけオランダ軍を降伏させたことで名をあげた。しかし戦闘が終わるとこのような熱血漢は組織に馴染まない人であるだけに軍としては扱いに困った。

参謀部別班で無聊をかこつうちに格好の仕事を見つけ出した。柳川はジャワ青年に対する軍事教育をほどこすことを提案し、ジャカルタ西郊のタンゲランに青年道場の看板をかかげ、諜報・謀略活動のための現地人要員の育成を行った。

柳川の意識は中野学校のインドネシア版であったが、インドネシア人を鍛えるという柳川の熱意に青年達は応えた。指導者になる人物が汗を流して身体を鍛えるという文化はジャワになかった。日本の相撲を取り入れたが、肌のふれあう肉弾競技はジャワ人にカルチャー・ショックであった。ジャワ人が得た最大の教訓は「スマンツ(semangat=精神力)」である。

タンゲラン青年道場は後に発足するジャワ防衛義勇軍錬成隊・ペタの母体となり、ボゴール(→114)に小団長要員の教育隊が設けられた。今日もその跡は国軍の訓練所となっている。

ジャワ全土から選抜された 400 名は3ヵ月のカリキュラムをへて 1943 年 12 月 8 日の開戦記念日にイカダ

¹⁰ 啓民文化指導所は日本の占領行政のPR機関として設立されたが、インドネシア独立後そこで育った人材が独立戦争を鼓舞するポスター作成するなどインドネシア文化の形成に貢献した。

広場(→158)を堂々の整列行進しインドネシア人を感激させた。

独立後、ペタ出身者はインドネシア国軍の幹部になり、結果的には軍幹部の人材養成の機関の役割を果たした。ジャワ青年の意気に共鳴して真剣に対応した日本人教官がいた。市来龍男(→358)はペタを天性の職場として没頭した。日本のペタ関係者にもインドネシアへの思い入れが強い。民族を越えた師弟愛の交流があったが師も生徒も年老いた。スハルト大統領の自伝に柳川の名が記されている。

第二次世界大戦のジャワ占領とインドネシア独立戦争を舞台にインドネシア独立に共鳴しインドネシア軍に加わった日本人を描いた映画(→359)『ムルデカ』の主人公島崎大尉のモデルは柳川である。映画で主人公は戦闘に倒れるが、実際の柳川は日本帰還を余儀なくされたため独立戦争には参加していない。

インドネシアへの思い入れのため 1964 年から家族もろともインドネシアに永住し日本料理店を営んでいたが、1985 年 9 月インドネシアに永眠した。拓殖大学に柳川の寄贈によるインドネシア関係の資料がある。
⇒309.ペタ郷土防衛義勇軍

355. 前田精海軍武官



海軍軍人の前田精(1898-1977)は鹿児島県出身で海軍駐在武官としてヨーロッパやアジア各国に勤務した。軍人の中では自由主義思想の持ち主であったらしくオランダ駐在の頃からインドネシアの民族運動に理解と同情を持った。

日本のジャワ占領とともにジャカルタの海軍武官府の責任者になるや、吉住留五郎、西嶋重忠といったインドネシアに思い入れのある民間人を嘱託として調査活動に従事させ、彼らを通してインドネシアの民族主義運動とパイプを持った。この中にスバルジョ、イワ・クスマ・スマントリなど独立後の要人がいた。

前田自身がこれらの人物と日常的に接したわけではない。給料と調査費を与え、自由放任にすることで民族主義者の活動は活発になった。その際、海軍武官府関係者という身分が陸軍の軍政の下で聖域の役割を果たした。

彼らの活動の中で特記されるのは独立養正塾である。インドネシアの独立後の人材育成を行うことを目的とするスバルジョ提案の独立養正塾を後援した。教育カリキュラムはすべてインドネシア側の自主性に任せられていた。

スカルノが海軍の占領地域であるスラウェシ島、カリマンタン島、バリ島へ遊説し、インドネシア意識の高揚を説き感銘を与えた。その便宜を図ったのも前田である。

独立後の新生インドネシアにおいて独立養成塾の出身者グループは“海軍派”といわれる人脈を築く一勢力をなしていた。後の共産党幹部に独立養成塾の出身者が多かった。

独立宣言時(→317)の8月15～17日の前田の活躍はインドネシア独立秘話として語られている。倒幕軍の江戸攻めを前にした勝海舟の役割のように思う。孫引きであるがド・フラーフというヨーロッパの学者も次のように述べている。

「崩壊のまぎわに勇敢にふるまったのは前田ただ一人である。彼はインドネシア共和国を建設す

ることによって敗れる祖国のためにつくそうとした。日本占領中の数少ない魅力的人物である」
スバルジヨ著「インドネシアの独立と革命」

前田は組織上の立場に恵まれていた。海軍武官府が東京と直結していたのに対して陸軍は[サイゴンの南方軍総司令部]⇒[シンガポールの第17方面軍]⇒[ジャワ16軍]という組織上のクッションが多すぎた。このため日本の敗戦という決定的瞬間においても情報不足の陸軍はインドネシアの動きに機敏な対応ができなかった。しかしこの立場の差も前田の功績を過小評価することにはならない。

戦後の前田は経済的にも失敗して不遇であった。1958年スカルノ大統領が初めて日本を訪問した際に病床の前田を見舞った。その後、健康を回復した前田は招かれて一度だけインドネシア独立記念祝典に出席することができた。ナラリア勲章を受賞した。またメンテンにある前田邸は独立宣言文起草博物館(→161)として公開されている。

⇒311.独立養成塾

356. バリ島の三浦襄



三浦襄

三浦襄は明治21年生まれ、仙台の人である。両親は熱心なクリスチャンで、本人もクリスチャンであった。太平洋戦争前にスラウェシ島に渡り、そこからバリ島に転住し自転車の輸入販売の【TOKO MIURA】を営んでいた。

しかし商売は店員に任せて、本人は住民の世話にバリ島中を駆け回り人望を得ていた。牧師の父の「南方に行ったら住民の利益のみを考えよ」という戒めの実行者であった。

バリ島民はヒンドゥー教の信仰の厚いことで知られる。宗教は異なっても敬虔な信仰から生まれる誠実さは普遍のものとしてバリ住民に受け入れられたのであろう。

高まる戦雲の気配に日本人の引揚が始まり、三浦は最後の引揚船で日本へ帰国したままの状態、太平洋戦争の開戦となった。

1942年2月18日、日本の攻略軍はバリ島のサヌール海岸(→174)に上陸した。三浦は海軍の囑託として従軍し、軍をデンパサールに誘導した。

日本兵に恐れをなしたバリ人も「三浦さんがいる」ことに安心した。日本の軍政期間は日本軍と島民の間に摩擦が生じることは避けられなかったが、多くは習慣の相違、言葉の不自由さに起因するもので、現地に詳しい三浦がこの両者の間に入り、多くの島民が助けられた。

日本の古武士を思わせる風貌であり、バリ島民の愛称は「白髪のおじさん」であり、「バリの父」であった。地元の人には「トアン・ブサール(Tuan besar)」と最大の敬語で呼びかけられた。

日本軍の派遣隊長も三浦をたて、三浦の推挙するプジャが知事になった。人をえた人選によって日本の軍政下のバリ島はインドネシアの他の地域では見られないほど平穏に推移した。ちなみにプジャはインドネシア独立準備委員(→312)のバリ代表となり、太平洋戦争後はオランダの勧誘を拒否したため投獄された。

三浦は日本の占領はインドネシア独立のための手段であると信じきっていた。それでもって日本の厳しい軍政の受入を島民に説得してきた。

しかし日本の敗戦によって独立の約束が反古になるや、徹頭徹尾謝罪の言葉でもってバリ中を回った。「日本人は戦いに負けると自決するとバリ人に教えた。ところがこの度は天皇陛下の命令で自決することができない。それではバリ人に嘘をついたことになったので日本人を代表して自分が自決する」と釈明した。

三浦の決意は誰にも止められなかった。バリでは火葬である。土葬のために必要なセメントを手配した。心配をして集まる住民を追い払い従容として拳銃で己を打ち抜いた。9月7日の夜であった。9月7日は日本が約束した独立が実現する日であった。

葬儀は日本式で行われた、参列するバリ人は王族以下1万人もいたという。日本人が一人で行ったププタン(→172)であった。その後も彼の墓には花が絶えない。日本人が訪れて慰霊祭を行うと今なおバリ人が集まる。

357. 吉住留五郎

東京都港区の芝の愛后山の麓に青松寺¹¹という立派な寺がある。その寺に吉住留五郎と市来龍男を顕彰する石碑がある。その碑にはスカルノ大統領の文言がインドネシア語と日本語で記されている。



独立は一民族のものならず全人類のものなり 1958年2月15日

Kemerdekaan bukanlah milik sesuatu bangsa saja, tetapi milik semua manusia

碑はインドネシア独立のために命を捧げた日本人の顕彰の碑であり、2名の名が記されている。吉住留五郎と市来龍男(→358)はインドネシア独立戦争に参加しインドネシアの地で不帰の客となった。

大木の下の木陰の碑にはうっすらと苔がついている。近くにある爆弾三勇士もインドネシア独立の志士も同様に遠い過去の出来事として歴史の風化を示している。青松寺では大掛かりな改修工事が行われたが、石碑がどのようになったか気がかりである。

戸川幸夫著「昭和快人録・知られざる戦史」(1964年)による吉住留五郎の略歴は38歳(1911-48年)の生涯である。山形県のかなり裕福な農家の五人兄妹の末弟に生まれた。教師と対立して中学を退学させられたのは直情的性格のためである。農民運動に関係したが、彼にとって所詮、日本は住みにくく悶々としていた所へ遠縁の紹介でジャワ島に渡った。

ジャワ島では農園などの職歴をへて町田泰作の下で『日蘭商業新聞』の記者となり、ようやく本懐の場をえた。折からの日本の南進政策の意を受けて来たるべき日本の進出のための事前工作として華僑に対して好日化対策を行い、東インド政庁から危険人物として国外退去させられた。



吉住留五郎

太平洋戦争勃発とともに単身密入国を計るがバンカ島(→104)で逮捕されてオーストラリアのアデレードの

¹¹ 青松寺は1467年の大田道灌が創建。曹同宗江戸3寺の一つ。

収容所に抑留された。その間にオランダが加えた虐待は彼の健康を蝕み、オランダに対する吉住の憎悪は増幅された。その後、民間人の相互交換でシンガポールに戻され、ようやくジャワ島に帰還した。

はじめはスラウェシ島で海軍の特務機関に配属されたが、後にジャカルタの海軍武官府の前田精武官(→355)の下で嘱託となり、この間に西嶋重忠やインドネシアの民族主義者達と知り合い次第にインドネシア独立運動にのめりこんだ。彼の経歴から窺われるのは思想的なものというよりは、“行動の人”といわれるように思い込んだら命懸けという性格的なものが彼の原動力であった。

終戦になりタンマラカ(→295)に共感¹²しインドネシア軍に身を投じる。軍の経験もないが市来の訳した『陸軍歩兵操典』をもとにインドネシア軍の指導を行う。肺を冒されていた吉住留五郎は血を搾るようにして『インドネシア独立戦争の戦略戦術』という書を表した。オランダに対抗するためにゲリラ戦を展開すべきであるというのがその主旨である。

1948年8月10日、東ジャワのブリタル近郊のセゴン山中で息を引き取る。アリフ(Arif)こと吉住はブリタルの英雄墓地に多くのインドネシア兵士に囲まれて葬られている。

358. 市来龍男

インドネシア独立戦争の1949年1月9日早暁、東部ジャワのスメル山麓のダンピット(Dampit)でオランダ軍の兵舎を襲うゲリラ隊の隊長アブドゥル・ラフマンは頭と肩に貫通弾を受けて倒れた。半年もすれば休戦で1年もすれば得られたであろうインドネシアの完全独立において自分の居場所がないであろうことを予感した者の捨て身の攻撃であった。アブドゥル・ラフマンは市来龍男という日本人である。



市来竜夫

後藤乾二著『火の海の墓標』に従って市来龍男(1906-49)の生涯を辿ってみる。市来は熊本県人吉の出身で明治39年(1906)に貧乏士族の家に生まれた。父は他所に家庭をこしらえて出奔したため、母親に育てられた。

落ちぶれた下級士族の絵に描いたような貧困を打開すべく昭和3年(1928)年、22歳の時、同郷の南洋成功者の伝手をたどり、スマトラ島に渡る。日本で習得した技術をもとに写真館で働いた。後に西部ジャワのバンドウンに移った。

トコ・ジュパン(→348)の店員として住民に接する。植民地社会の中でインドネシア人に対して優越感をもつ日本人である自分に違和感を抱く。やがて彼はスンダ人女性と同棲する。当時の日本人社会からの“おちこぼれ”であった。

彼がインドネシアにのめり込むようになった動機は当時マレー語といわれたインドネシア語の持つ魅力¹³に引かれたためである。日本人社会とは縁を断って『インドネシア・日

¹² タン・マラカが急速に勢力を拡大した背景には吉住留五郎が管理する資金がタン・マラカに注入されたと鄒梓模は述べている。⇒「スカルノ大統領の特使」

¹³ 日本が蘭印に攻め入る前にインドネシア向け海外放送ではインドネシア・ラヤを演奏し、インドネシア語で日本の侵攻がアジ

本語辞典』の作成に没頭する。

折しも勃興するアジア主義者の影響を受けた日本語の『日蘭商業新聞』がバタビアで発行されており、市来龍男はその記者となった。アジア主義者の人脈の末端に自己の思想の安住場所を得た。ここで生涯の盟友となる吉住留五郎と出会う。

「日本によるアジア諸民族の解放」を主張する論調はオランダ当局に警戒されて、日本へ帰国した際にジャワ島への再入国を拒否(1938年)される。

太平洋戦争勃発後は占領行政のため陸軍の囑託としてジャワ派遣軍とともにジャワに戻った。しかし彼はすぐに日本の軍政に失望する。何故なら日本が植民地を解放するというのは占領するための方便であった。

彼が任されたことはインドネシア語の権威者としてインドネシア語整備委員会の常任委員としてインドネシア人との共同作業で外国語のインドネシア語への言い換えの仕事であった。

失意の中で市来龍男は柳川宗成(→354)が養成したインドネシア人による軍であるペタ(→309)に情熱を傾ける。日本軍に充たしえないものをインドネシア人の軍に賭けたのであろう。市来は日本の『陸軍歩兵操典』をインドネシア語に訳し教科書としてインドネシア軍を指導した。

太平洋戦争終了前から日本軍を離れた市来はアブドゥル・ラフマンというインドネシア人になる。ダンピットにある【日本人の墓 NO.1】が市来龍男の墓とされている。

359. 独立戦争の英雄

インドネシア独立戦争に身を呈して参加した日本兵はジャワ島とスマトラ島の両方にいる。独立戦争の主戦場はジャワ島であり、終戦時の駐留日本兵もジャワ島の方が多かった。しかしながら実際にインドネシア軍に参加した日本兵はスマトラ組に顕著である。

その理由はジャワ島の当初の占領部隊はニューギニア戦線などに転戦し、別の部隊が進駐してきた。これに対してスマトラ島の日本軍の第25軍はマレー攻略からスマトラ島を占領した部隊がそのまま終戦を迎えたことからスマトラ島駐在の兵は現地に親近感を持つ機会が多かった。もう一つはスマトラ島攻略の日本軍の主力は近衛師団であった。近衛師団は特別の師団であり、全国から選ばれた兵士が入団した。エリート師団の兵士には責任感、使命感がより強かったのではなかろうか。

太平洋戦争の終了によって日本の約束したインドネシア独立は反古^{はらこ}となった。オランダの出方から独立戦争は必至と見たインドネシアは日本兵に参加を呼び掛けた。インドネシア軍は日本軍の持つ武器、弾薬を求めたが、何より渴望したのは実戦闘の経験者であった。軍隊訓練を受けている日本兵は先達であった。インドネシアの呼びかけに応じて独立戦争に身を呈した日本人は800人とも1000人ともいわれる。

その一人である宮山滋夫がインドネシア独立戦争に参加するため離隊した際の置手紙を記す。(出所 木下迪介氏資料による)

敢えて大命に抗して独自の行動にい出んとす
言うなかれ敗戦の弱卒天下に用なしと
生を期して米英の走狗たらんよりは微哀に殉じて火による虫とならん
天道は正義にあり 歴史の赴くところ正義にあらずして何ぞ

ア解放であることを告げた。市来龍男はインドネシア語を担当しインドネシア人を感激させた。

敢えて不遜の行動に出ずるゆえん 乞うご容赦あらん事を 戦友諸君

インドネシアの思いがけない軍事抵抗にてこずったオランダはインドネシア軍は日本軍人が指揮しているに違いないとにらんだ。日本人には特別の懸賞金がかかけられ、逮捕された日本人は処刑された。

2001年に公開された日本映画『ムルデカ MEREDEKA (独立の意味)』はインドネシア独立戦争に参加して犠牲となった日本人を描いている。インドネシア独立に身を捧げた日本人がいるという事実も押し付けがましくすればインドネシア人の機微にふれるようでインドネシアでの評判はよくない。インドネシアでは対抗上“CA BAU KAN”という反日映画を製作した。

インドネシア訪問の国賓はしばしばカリバタ(Kalibata)英雄墓地に参拝する。墓地はジャカルタ郊外のパッサルミングー街道に近い製靴工場のあった広い敷地にある。

この墓地に葬られているのは独立戦争に倒れた英雄である。勲章を有する者が入る資格あり、壁に金色のインクで名前が記されている。3400名の中に日本人13名が葬られている。インドネシア全土では41名という。

360. 帰らなかった日本兵

独立戦争が終了とともに独立戦争に参加した元日本兵戦士にも故国へ引き上げる機会があった。しかしインドネシア国籍を取得してインドネシア永住を決意した者もいる。

幸運にも独立戦争を生き残った人はインドネシア人と結婚し、国籍を取得しインドネシアの人となった。このような人に対して様々な感慨をこめて“ジャピンド(Japind=日系インドネシア人)”という言葉があったが、今では死語のようである。

石井正治著『南から』はちょっとした行き違いから残留日本兵となり、独立戦争に参加してインドネシアの土に同化することを決意した人の自伝である。故国日本とインドネシアの間に揺れ動く葛藤の中で幾多の辛酸をなめながら成功した。

その他の人の自伝、評伝に次のようなものがある。①後藤乾一著『火の海の墓標』、②柄窪宏男著『二つの祖国を生きた』『日系インドネシア人』、③早川清著『忘却の青春』である。①は日本の占領下で果たせなかったインドネシア独立への贖罪、②は独立運動への共感と意気、③は混乱期の偶然、と各々理由は異なる。

元日本兵には事業にも成功し悠々自適の人もある、その日の生活に困る人もいる。しかし年老いた“元日本兵”は年々減っていくことだけは確実である。帰らなかった日本兵の中には帰れなかった日本兵もいたであろう。

長洋弘氏は日本人学校に勤める傍ら『帰らなかった日本兵』を訪ね、その写真集を刊行し1995年林忠彦賞を受賞した。元日本兵の額に刻まれた^{しわ}皺の^{ひだ}襞は年月の重さであった。写真展は日本とインドネシア各地を巡行され多くの人の心を捉えた。

1979年日本人残留者180名によって「福祉友の会(Yayasan Warga Persahabatan)」が結成された。一匹狼的な決意でインドネシアに残留した人が会に参加するようになったのも時の流れである。

会員の代表は当時の吉良大使から夕食の招待を受けた。大使からの招宴はヤヤサンに対する故国の認知として出席者は感激した。



乙戸昇

その後、年老いた元日本兵の残留者に軍人年金の一時金が交付されたのは戦後数十年もたってからである。すでに日本人でない彼らへの年金法の壁の障害を乗り越えるには関係者の並々ならぬ尽力があった。

その経緯を伝える福祉友の会「会報」の几帳面な手書きは彼らにはインドネシア独立に寄与したという誇りとともに、“脱走兵”という汚名の自責に苦しんでいたことが記されている。日本政府からの一時金は金額の多寡の問題でなく何よりも晴れて日本政府に認められたという喜びが窺われ、読む人の胸を打つ。

会の設立と運営に尽力をつくしてこられた乙戸昇さんは 2000 年 12 月に急死された。インドネシア名“Kumpul N. Otsudo”として家族に見守られインドネシアに土に帰された。享年 82 歳であった。多くの人が温厚な人柄を偲んでいる。合掌。

361. ミエ学園

日本語学校ミエ学園 (Lembaga Pendidikan MIE Gakuen Kursus Jepang) はジャカルタのテベット地区にあるモルタルの 3 階建ての建物である。1994 年 10 月に開校し、日系二世、三世や日本で就業するインドネシア人が日本語の習得に励んでいる。



小倉ミエ

この学校は一人の女性の尽力によってできた。小倉みえさんは築地に割烹料理店を経営しており、^{かきまぐ}饗饌として毎日みずから店頭で働いている姿からは年齢が信じられない。

宝塚スターなることを憧れたというだけの長身である。美人であったことは半世紀以上前の写真を見なくても十分に分かる。もし戦争がなければ華やかな人生を送れた人であろう。

彼女の学校の寄贈は女手一つで営々として築いた資産からであり、分限者の慈善行為ではない、まして老夫人の気まぐれではない。彼女はインドネシアに御礼を返したかっただけである。何の御礼なのか。何が彼女をしてそこまで駆り立てたのか。

彼女は戦時中、海軍の募集に応じて新天地を求め、スラバヤ(→140)の海軍クラブの事務員に応募した。東京でも戦争の影響による生活困難は重苦しくのしかかっていた頃である。多くの輸送船が米国の潜水艦に攻撃される中で昭和 19(1944)年 1 月に佐世保を出帆しインドネシアに奇跡的にたどり着いた。

スラバヤは日本海軍の第二南方派遣特別根拠地隊があり、南方に作戦を展開する海軍の補給基地であった。海軍給養施設もあり海軍将兵の休養と慰安のための直営の食堂・料理店を設けていた。彼女にとっては物資は溢れるばかり豊富にあり、内地から来ると天国に見えた。しかしそこは明日をも知れぬ兵士がつかの間の時を過ごした場所である。日本の若い女性の姿を焼き付けて死に赴いた軍人もいたであろう。

彼女は日本人のみならずインドネシア人にも誠心誠意対応した。このためインドネシア語を学習した。死を覚悟し荒れる日本将兵の前に身を挺してインドネシア人の従業員を守ることもあった。

戦争が終わり、幾多の困難を越えて昭和 21(1946)年 8 月に帰国した。そこで見たのは上野駅の浮浪児の集団であり、パンパンといわれる女性の群れであった。

死んだつもりになって働いた。昭和 25(1950)年に始めた旅館業は小さいながらもビルとなり1階の割烹料理店には海軍やスラバヤ関係者の溜まり場になった。

祖国の復興に伴い事業も定着してもなお満たされない心の空洞にインドネシアが^{よみがえ}蘇った。インドネシア滞在は彼女の最も多感な青春の2年半にすぎない。その間に起きたことは天国と地獄であり、全生涯の濃縮であった。彼女の青春の証、存在の証がインドネシアであった。

1993年、インドネシア人の教育のために奨学基金 2200万円を提供した。身内やファンの多くが同調した。さらに日本とインドネシア架け橋になる人材の育成のために福祉友の会(→360)が受け皿になり設立したのが冒頭の日本語学校である。

362. 戦時賠償

1958年1月20日、日本とインドネシアの賠償協定はジャカルタで藤山愛一郎、スバンドリオ両外相の間で締結され、4月15日批准書を交換して発効した。日本が戦争中にインドネシアに与えた損害を償うものである。

賠償金総額 223 百万ドル(当時の円換算で 803 億円)を物資か役務で提供するものである。その他に焦げ付き貿易債権 177 百万ドルの放棄、経済協力借款 4 億ドルを加えると総計約 8 億ドルの規模である。

スカルノ大統領は反植民地を怒号するも、足元を支える経済が脆弱^{ぜいじやく}であり反西欧の言動から欧米の資金援助はなく外貨の欠乏は深刻であった。賠償交渉は 1951 年から始められていたがインドネシア側は経済事情の悪化で引き伸ばしが許されなかった。

当時、スカルノ大統領は地方の反乱(→378)に直面していた。イリアン問題のこじれでオランダの KPM(→475)がインドネシア海域から船舶を引き上げた。島嶼国家インドネシアは島間の海上輸送が停滞し、軍事行動のみならず経済活動に支障をきたした。

当面緊急を要する案件は船舶であり、浮かびさえればどんなボロ船でもよいというインドネシア側の弱みがあった。これがインドネシアが当初要求 175 億ドルを取り下げて冒頭の賠償協定に踏み切った理由であろう。

鉄鋼商社の木下産商は賠償資金で船9隻の輸出を締結した。9 隻のうち 5 隻はよくもインドネシアまで航海できたと思えるような中古船で、しかも市価の 3 倍といわれた。その中には興安丸という数奇な船歴を有する船もいた。

賠償は資本財の供与に重点が置かれ 90%を占めた。4%が消費財、5%が役務である。当時の日本にとって 8 億ドルは巨額であったが、実際の支払はインドネシアと契約を締結した日本企業に円貨で行う方式であったため日本の外貨持ち出しにはならなかった。

日本企業のインドネシアへの売込みは木下産商(木下茂社長)、東日貿易(久保正雄社長)の政商が暗躍し、スカルノ大統領に日本女性が人身御供として送られた。インドネシア・ビジネスがダーティなイメージ¹⁴を伴うものとなった起源は賠償協定にある。インドネシア賠償汚職が 1959 年の日本の国会でとりあげられた。

賠償による供与品目にはダムや橋梁や工場などインドネシアの経済発展に資するものであったが、ジャカルタやバリ島のホテル¹⁵やサリナ・デパートなどはスカルノ大統領好みの賠償物件もあった。

インドネシアへの経済進出という面において、日本は賠償という名において西欧諸国とスタートラインに並

¹⁴ 賠償問題をめぐる裏話は鄒梓模著の「スカルノ大統領の特使」(S56 中央公論社新書)に記されている。

¹⁵ 戦時賠償のシンボリック存在がホテル・インドネシアである。しかしホテル・インドネシアも経年による劣化で閉鎖された。

ぶ前に既に走っていた。その後の外国勢の中で日本は常にトップ・ランナーであった。明らかに賠償は日本のインドネシア経済進出のテコの役割を果たした。

その後、ヘイホ問題(→306)、慰安婦問題などが提起されるも、賠償問題はスカルノ大統領時代に解決済みというのが両国の当局の公式見解である。日本のインドネシア国民に対して^{じくじ}忸怩たるものは ODA 経済協力ですりかえられている。

363. デウィ・スカルノ夫人

ジャカルタの南にある軍事博物館の建物はかつてヤツソ会館といわれた。「デウィ夫人(正式インドネシア名ラトゥナ・サリ・スカルノ・デヴィ(Ratna Sari Sukarno Dewi)とは根本七保子という日本人であり、その弟の八曾男の名にちなむヤツソ会館がスカルノ大統領の第三夫人の邸宅であった。

根本七保子がスカルノ大統領夫人となった経緯は、賠償協定の利権のため女好きのスカルノ大統領に取り入る目的で日本の政商の久保正雄が彼女を大統領に紹介した。彼女がインドネシアに連れてこられた時にはすでに同じ目的で金勢さき子という女性がいたが、さらに若くて美しい交代要員が現われて自殺した。

実態は“生きた人形”の贈り物であるが、その後の彼女の波乱万丈の人生は一人の日本女性のたくましい生き方といえる。恰好の小説の題材となり、『神鷹(ガルーダ)商人』『生贄』『密書』などが有名である。

スカルノ大統領の複数妻問題(→442)は当初から批判されていた。まして外国人である第三夫人には国民の目は一層厳しかった。デウィというインドネシア語の名前は稲の女神(→698)にちなむ、このような神聖な名前を外国人に与えることに国民感情は複雑であった。

しかしその時にはスカルノ大統領は独裁者であり、批判の声も内に籠った。彼女の武器は美貌もさることながらやはり日本の経済力であろう。やがて彼女はインドネシア行を取り持った人の思惑をはるかに越え、夫人の座を確保し公的な場にも姿を現した。

大統領からインドネシア・日本親善協会会長に任命され、日本のからむ経済関連事項、特に利権のからむ物件に口をはさむようになった。日本も国をあげてそういう彼女を利用したといえる。

イスラム教では4人の妻まではコーランで認められている。第一夫人(メガワティ大統領の母)は別居していたが、共産党のかつぐ第二夫人と利権に強い第三夫人の大統領を巡る戦いは女の艶と政治勢力が交差し、迫真に満ちていた。

女好きという大統領の性向の問題であっても複数の夫人は政治との係わりが深かった。スカルノ大統領の絶頂時には第四夫人も存在していた。晩年にはそれ以外にもまだ少なくとも二人¹⁶はいたという。脱帽！

9月30日事件(→384)の政治混乱の際に、デウィ夫人はジャカルタの日本大使館に保護を求めたが断られた。彼女が大統領夫人である以上その保護は政治的行為になるからである。

インドネシア滞在中もまもなく海外に逃れた。その後、彼女はスペインの貴族と再婚して離婚した。ジャカルタの高級レストランで彼女を見かけるという話をきく。彼女がインドネシアに用があるのは隠し財産があって定期的に集金をかねて見廻りに来ていると思うのは下司の勘ぐりである。

彼女の裸の写真集が刊行された。元大統領夫人の裸の写真にはインドネシア当局も困惑している。相変わらず昼の下らぬTVに出演して存在を顕示している。

¹⁶ 昼寝用の女性が毎日つかえ引き換え同衾した。スカルノの肉体は婦人なしではいられない特異な病気を持っていた。
⇒「スカルノ大統領の特使」

364. 日本ワヤン協会

ワヤン(→902)はジャワ芸術の至宝であるが、ジャワ語で演じられるため外国人にとって言葉の壁が立ちふさがる。しかも古代ジャワ語である。インドネシア人でもジャワ人以外の外島出身者もワヤンの言葉がわからないので敬遠しがちである。

ワヤンに取付かれた松本亮という日本人がいる。ワヤンとの縁はジャワ島遺跡廻りでワヤンの上演にめぐり合い、初めてのワヤンに感動したのが始まりである。古いジャワの文化が新時代にも躍動しつづけている様に感嘆した。以降はワヤンに没頭し、40歳からジャワ語の勉強を始めた。

1974年、日本でワヤン上演を機会に発足した日本ワヤン協会を主宰している。自らダラン(→874)になって影絵人形を操る。ワヤン上演を目指してワヤン協会の会員の手で日本人自身がワヤンを演じるようになった。老若男女を問わないワヤン好きが氏の周りにおり、著名なダランを招き日本でワヤンを上演している。

飄々とした老体の身を引きずり日本とジャワを往来している。とにかくワヤンが好きという人柄はジャワの王侯、貴族、名あるダラン、政府の文化関係者のみならず名もないジャワの庶民にいたるまで交友の範囲は広い。

ワヤンやガムラン、宮廷舞踊などジャワ文化を日本に紹介してきた。日本とは異質な豊かさを感じジャワの近代生活に毒されぬ貧しさを羨む。エコノミック・アニマルと軽蔑される日本人の^{まちが}埒外の存在である。松本亮は収集したワヤンで家一軒分が一杯になるらしい。ワヤン研究の第一人者であるが、本人は学者のつもりはさらさらしない。ワヤンが好きでたまらない民間の^{とくし}篤志家を自称している。

ワヤンという芸術表現を舞台芸術であると確信し、ワヤンをもちいた日本の創作ワヤン劇も10作以上も手がけている。

1999年2月、72歳で松本亮はインドネシア政府より文化功労勲章を受賞している。文化交流とか上段に構えたものでない。自然態のしからしむところである。

松本亮著『ジャワ夢幻日記』は著者のジャワ滞在日記である。著者は中部ジャワのソロのマンクヌガラ王宮(→131)近くの貴族屋敷に滞在していた。

古都の静かな住宅地に物憂い昼下がりにガムランの練習の音が夢か幻のように聞こえてくる。ワヤンの魅力にひかれた一日本人がワヤンの風土にどっぷり漬かった様は“桃源郷”のように心地よい。静謐な語り口にはインドネシア語はもとよりジャワ語を理解し、ジャワの歴史、文化、習慣、社会、への^{ぞうけい}造詣の深さがにじみ出る。ジャワ文化理解の必読書である。

松本亮のその他の著書は『ジャワ影絵芝居考』『ワヤン(カラー新書)』『マハーバーラタの陰に』『ワヤン人形図鑑』『悲しい魔女』『ラーマーヤナの夕映え』『ワヤンを楽しむ(カラー版)』等々である。

歴史編 完

著者 大槻 重之 (おおつき しげゆき)



著者略歴

- 1938 京都府綾部市に生まれる
- 1961 大阪大学経済学部卒業
関西電力入社
以降主として燃料業務に従事
- 1998 関西電力退職後三田市に居住

- 著書 「燃料が電気をつくる」 1972
「インドネシア百科」 1991
「バリ島百科」 1992
「マレーシア百科」 1993
「続・インドネシア百科」 1994
「石炭をゆく」 1998

インドネシア専科 C歴史編

発行日 平成 19 (2007) 年 9 月 20 日
著 者 大槻 重之
発行者 大槻 重之